



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER 第19号 2010/11/05

発行所 英 国王立写真協会・日本支部
〒 107-0051
東京都港区元赤坂 1-7-10
元赤坂ビル 9F
Tel 03-5413-7829
Fax 03-5413-7410
E-mail : yoshi-rpsj@hotmail.co.jp
発行人 豊田芳州 編集人 川村賢一

<http://www.rps-japan.org>



快挙! RPS展2年連続入賞! 第153回国際プリント写真展

スポンサーテーマ部門賞2年連続受賞 テーマ: 'Cities of the world' (世界の都市)

表彰式に出席して

林 喜一

7月14日午後7時、ロンドンのビジネス街にあるオパリー社に於いて表彰式が挙行政され、出席して来ました。

表彰式では一番目に紹介されて、壇上に上がりました。私の写真がプロジェクターで映され、審査委員長の講評に続いて表彰状と賞金を頂きました。昨年に続いてでしたので、沢山の拍手を頂きました。

英 国王立写真協会日本支部に入会してから、3回の応募になりますが、今年も入賞ができましたことを無上の喜びと致しております。

今回は世界各国から3000点以上の応募があり、最終選考に124点がノミネートされ、運良く入賞できました。

受賞作品の「家に帰る」は、2008年ベトナムのホーチミン市郊外での撮影です。電気修理店の前を市場帰りの夫婦がオートバイに乗って通り過ぎる一瞬を切り取りました。

私は疲れていたのを止めて座り込んでいると、妻が竹かごを持って、逆乗りして来た姿にユーモアを感じながら、レンズを向けました。生活のためにみんなが一生懸命に働いている姿に魅力を感じながら撮影した一枚です。



「The New Horizon 新たな展望」 長崎展開催

2010年5月14日- 5月31日まで、長崎歴史文化博物館にて、第8回支部写真展(東京で開催)を再度開催した。

昨年をはじめより懸案であった長崎巡回展について、今春、開催のわずか1ヶ月前に、急遽長崎歴史文化博物館という大きな会場のギャラリーでの開催が決まった。

会場は、折から坂本龍馬関連の特別展示「幕末長崎古写真展... 龍馬と彦馬、維新のまなざし」で賑わっており、またとないチャンスでもあった。

長崎は、開国以前からのもっとも古い国際都市であり、横浜の下岡蓮杖とともに、日本の写真術の開祖である上野彦馬が活躍した都市でもある。

そういった歴史的風土を背景に、長崎は写真との関係が深く、関心も高い。その長崎で、今回、英国王立写真協会日本支部として写真展を開けたことは、大変意義深い。

わずか1ヶ月の準備期間ではあったが、展示内容の英訳や、発送準備など、有志会員で手分けして間に合わせた。

また、東京展では間に合わなかったが、昨年のRPS第152回国際プリント展スポンサー部門賞を受賞した林会員の作品と、英国ロンドンにおける受賞の様子を紹介するパネル展示を行い、本部とのつながりの一端を紹介した。

期間中の来場者数は、2,000人を超え、150枚準備した支部案内カードも、早々と底をついた。

右上:「可能性への挑戦」より

A: 鳥瞰(本村政治)

B: サーブ Speed & Placement(高原直哉)

右中:「宿命の開発」より

C: 珠江の沙面波止場の夜景 (高木祥光)

D: 条(渡部誠)

右下:「精神の創生」より

E: 川流水乱成糸(木了俊介)

F: It sounds good(大畠勝彦)



第4回 リレートーク研修会

2010年7月1日、東京六本木「霞会館」にて、リレートーク第4回研修会(担当:田中会員)を開催する。

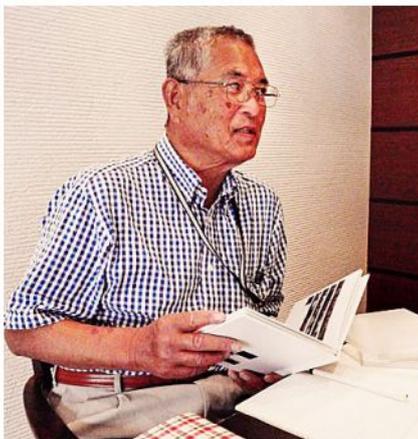
田中会員は、もともと柔道家であり、以前、箱根の保養所で景観料理という新境地を切り開いた板前でもある。

今年のRPSJ展では、景観料理の独自の世界を見せてくれた田中会員だが、今回はライフワークである富士山の撮影と、こだわりの写真観を披露していただく。

まさに労作である富士山の写真集数冊を提示しながら、撮影現場での体験談とノウハウ、武道家の精神性に裏付けられた独特の写真観は、孤高の領域だ。



『写真撮影は心に汗をかくこと』



田中 宏明

「波を発する富士山の写真」

ビートたけしのTV番組「...家庭の医学」で、波が取り上げられていました。(波とは、覚醒安静時に脳から発する波形で、快適な環境におかれているパラメーターになるといわれる。)

波が多く入浴として、ゆず風呂、オレンジ風呂、ドクダミ風呂などがあげられています。

国際医療福祉大学大学院教授の報告では、波がよく出るのは、景観(風景)写真だということ。とくに富士山の写真を見ると波が出ると言うことです。

昔、銭湯には富士山の絵が描かれていたのを思い出します。風呂に入って富士山を見ることは、理想的なかんきょうだったのです。当時の関係者は、富士山の効用を知っていたのでしょうか。

「乙女峠からの定点観測撮影」

はじめは、料理の写真の撮っていましたが、箱根にいらした方々に紹介できる写真が撮れたらと考えていました。

1994年、あるきっかけで乙女峠を知り、6年間毎日、乙女峠に通いつめました。雨の日も風の日も。雪の日も。

周りの人たちは、私を不審に思ったようですが、そのとき私は、「しめた」と思いました。周りが「おかしい」といったらチャンスがあると思っています。

毎日立っていると、いろいろな人が声をかけてきました。中には、富士山撮るならいい穴場を知っているよという人も

いましたが、私は、1年間撮って納得したら次の場所に行くよと言って断りました。しかし、1年撮っても納得いく写真は一枚もありませんでした。

乙女峠は何もない味気ない場所です。御殿場の町の上に富士山が見えるだけで、御殿場の町には送電線が見え、撮影条件は決してよくありません。

だからこそ燃えるものがありました。

電線を目立たなくする被写体条件と、撮影テクニックを研究しました。朝、日が射し来て、ちょうど白くなりかけたとき一瞬消えるんです。その電線が目立たなくなる30分ぐらいの間に撮りました。

町を入れる場合は、50mm~70mmで撮りますが、どうしても消えない場合は、200mmの望遠で、御殿場の町を切っただけを撮りました。

また、夜になれば、電線は完璧に消えます。

「絞りとシャッターで色を出す」

夜景では開放で30秒という露出時間が成否の鍵になるのを知りました。みなさんよく絞り込んでいいのを撮ろうとして失敗します。時間がかかりすぎて雲が動いてしまうのです。

赤富士を撮ろうとして、はじめは完全に失敗しました。それから撮影を積み重ねているいろいろなデータを得ました。撮影は、もちろんフィルムで行っていましたが、フィルターを使わずに、絞り値とシャッター速度だけで色を出すデータを見つけました。絞りにより写る色が変わるので。

撮った写真は、すべてデータを取りました。

絞りF8は、黄富士を撮影するポイントになりました。富士山を照らす光には、時間帯により青、赤、黄色があります。紅富士を黄色光の時間帯に撮影すると黄富士に写ります。

赤富士の場合は、できるだけ絞った方がよい。

下: 労作の写真集「乙女富士 - 年三百六十六変化」と「五彩富士山」



「撮影は心に汗をかく」

写真というのは、話にくい対象です。

ある人との会話で、「自分は現場で汗をかくんだから、事務や営業は脳みそに汗をかけ」と言ったことがあります。

では写真ではどうなのだろうか？

写真は、見える被写体しか写らないが、それにプラスするのが撮影です。それはすなわち無形の世界です。撮影は、心に汗をかくことと言えないでしょうか。

ある時、大山行男さんが来て、「富士山はいい加減にやった方がいいよ。」と話す。「なぜですか？」と問うと、「死んだやつがいっぱいいる。」と答えた。

そのときは、まだ元気でしたからまだピンと来ませんでした。その後大病し、何度か死ぬ思いもしました。



左:「安」 右:「廻」

「五彩富士の着想」

はじめは、料理やっていた関係もあって、春夏秋冬と1年12ヶ月にこだわりました。

「つるし雲」の12ヶ月、「笠雲」の12ヶ月、「雲海」の12ヶ月、そして、「雪」の12ヶ月を集めようと思い、15シリーズくらい作りました。

雪の降らない8月の富士山は、ちょっと大変でした。ところが、8月でもときによって降るんです。30分で消えてしましますが。

ただ、12ヶ月のシリーズは、展示や販売の面で負担であるうえに、観客に馴染まないのではないかと思い、5点くらいの方が、私の顔になりやすいと考えました。

そこで、「五彩富士」を思いつきました。五彩とは、青、赤、黄、白、黒を意味します。

これを核に、プラスして写真を発表すればいいのではないかと考えました。

「春夏秋冬が自分の周りを廻る」

一般に、富士山の前景に季節感を盛り込むことを定石としていて、多くの写真家は、季節に会わせて撮影地を撮り込む。春は、桜や茶摘みのお茶を入れたり、秋は、柿の木を入れたりする。

いろいろ写真展にも行って、最初は感動するが、そのうち誰の作品を見てもみな同じように見えてくる。

一方、乙女峠からの撮影では何も取り込めない。桜の木も茶畑も柿の木も何もない。御殿場の町しかない。富士山の表情のみで季節感を表現しなければならなかったし、富士山を撮るのが、花を撮るのが、明確に徹したかった。

この難問にチャレンジしました。できなかつたら、自身の限界だと思いました。乙女峠での定点観測撮影では、春夏秋冬が自分の周りを廻っているようだった。

ひとは、春夏秋冬富士山の回りを廻っていますが…。

やっているると、雪が降って赤くなる紅富士は結構撮れる。

ところが、気がついたら11月~3月までと、4月~5月の紅富士は、色が違うんです。3月までは、赤系の紅富士で、4月5月になると、ピンク系になるんです。

富士山は、長い間撮っているうちには、考えられないことも起こる。夜中に、月と、日が出る前の太陽の明かりが雲によって照らされたのが、赤い富士山が撮れたことがある。

どうしてこれが撮れたのか、不思議な写真が、夜中には結構あります。(五彩富士作品は、第10号の記事参照)

「技巧に頼らないのが私流」

私の写真の原点は、柔道です。人は誰でも弱いものです。しかし、心の持ちようで、強くもなれます。

寒さに負けるんだったら、富士山は撮るなど言いたい。

当時使っていたカメラは、ペンタックスのSPです。ネジで回してレンズをつけるタイプです。レンズ交換は大変です。手が凍り付いてくっついてしまう。

手が冷たいのは手袋で何とかなるが、一番困ったのは、シャッター押したら、ミラーが上がったままくっついてしまうことだった。そのまま上着をかぶせて、車の中に運び、しばらく待つと、暖まってシャッターが降りた。

1日に撮った写真は、たった2枚です。

フィルムは、フジカラーで撮って、プリントは、コダックラボで頼みました。

月を入れる場合、どちらかに寄せる構図を撮る写真家もいますが、富士山は稜線が命だから、片方を切るともったいない。あくまで富士山を真ん中に入れて、乙女峠の左右対称の美しい稜線を出したかった。

PLフィルターも、空が青く出過ぎることがあって、いっさい使わなくなりました。赤富士にしても、フィルターをいっさい使っていないことが、私の写真の売りです。

パソコンで作った赤富士は、実際と違います。実際の富士を見ていない画家の絵も、すぐ分かります。

「作品は自分の子供と思う」

私自身は、売れる写真を撮ろうと思って撮ったことは、一度もないです。その瞬間、瞬間にだいたいものを撮ろうと思いました。そして、写真展をやったら、これ欲しいという人が現れました。

写真作品の価格ですが、プリント代、装丁代などの実費の3倍と決めています。

半切が約7万円です。全紙は、1.5倍の10.5万円です。これくらいで、写真展のギャラリイ代くらいは出ます。赤字になっても、作品は財産だと思えばいいのです。

撮った写真は、発表・展示すべきだと思います。写真は、自分の子供と同じだと思います。世間にさらして、たたかれて、強くなっていく。

物事を深く考えるようになったのも、写真のおかげです。

現在も体調を見ながらの生活ですが、皆さんとこうして写真談話ができるのは大変うれしく、元気をもらっています。

(編集後記)

前号でご報告の通り、大幅な遅れが生じてしまいましたので、今号はダブルイシューで対応させていただきました。

次号もできるだけ早めに、発行できればと思っていますので、原稿のご協力お願いいたします。(川村)